

町史

とっておきの話

239

只見町教育委員会

渡部 賢史

只見の歴史を探る②

只見町最古の土器



▲写真1:小川上野遺跡から出土した縄文時代中期の土器

只見町で人が営みを始めたのは、旧石器時代からと考えられています。旧石器時代の石器が、塩沢わらび園付近の猿倉遺跡や蒲生岳の山ろくにある蒲生A遺跡から発見されているからです。また、土器が一般的に使われ始めたのは縄文時代です。縄文時代は、およそ一万三千年前から二千五百年前まで続き、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期に区分されています。では、只見町で確認されている土器は、いったいどの時代のものなのでしょう。

土器は、標識遺跡ひょうしきという時代の区分に重要な役割を果たした遺跡を基準として、その時代の遺構（柱穴など）や遺物（土器など）と照らし合わせて、およその年代を決めます。只見町の土器の年代を決定するには、他県や他市町村から発見された

土器を基準に行います。

これまで只見町でもっとも古い土器は、縄文時代中期（四千年〜五千年前）とされてきました。この時期の土器が確認されているのは、大倉の窪田遺跡、館ノ川遺跡、小川上野遺跡（写真1）、深沢遺跡、小林外出遺跡などです。窪田遺跡は、縄文時代晩期から弥生時代中期の土器が中心ですが、縄文時代中期の大木9式（宮城県七ヶ浜町大木貝塚）という形式の土器があり、これが一番古い土器でした。館ノ川遺跡、小川上野遺跡、深沢遺跡、小林外出遺跡でも、縄文時代中期の大木8式という形式の土器が確認されています。

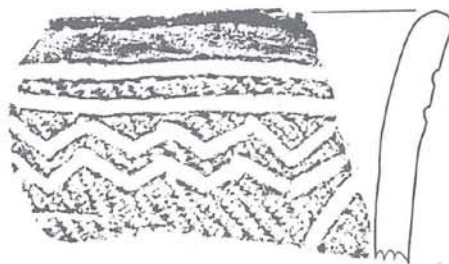


▲写真2:七十苧遺跡から出土した縄文時代前期の土器（諸磯C式土器）



▲写真3:七十苧遺跡から出土した縄文時代前期の土器（大木5式期土器）

しかし、只見町には縄文時代中期よりも古い土器はないのでしょうか。実は数は少ないですが、最古の土器が小林の七十苧遺跡で発見されました（写真2、3）。これは平成二十〜二十三年にかけて行われた伊南川の河川改修工事による発掘調査でわかったものです。写真2は、諸磯C式（神奈川県三浦市諸磯貝塚）と同じ形式と考えられる土器です。小さな破片ですが、たくさんの線で区画され、コブ状にペタペタ貼り付けた文様をしているのが特徴です。写真3は、線で区画して、連続した山形の文様をしている土器です。同様の形式は不明ですが、大木5式期と考えられます。



▲図1:会津美里町青宮西遺跡から出土した土器

会津美里町の青宮西遺跡あおみやにしというところから非常によく似た土器が発見されています（図1）。これらの土器は、それぞれ縄文時代前期（五千〜六千年前）に位置付けられ、現在のところ町内で最も古い土器となります。

只見町では、これまで旧石器時代から縄文時代中期までの土器は発見されておらず、空白の時期だったのですが、その時代に人が住んでいなかったわけではなく、単にその時代の遺物の発見例が少ないだけではないでしょうか。これからの発見が期待されます。